

巻頭の辞

都留重人

マックス・プランクの有名な言葉に“science progresses funeral by funeral.”というのがある。世が変わるごとに、科学のどの分野でも、言わば新しい「付加価値」が加えられて、進歩は累積的に続く、というのであろう。それは、登りつめてしまえば山頂に立つこととなり、進歩はそこでほぼ止まる場合もあるかもしれない。技術の卑近な例で言えば、写真機の改善過程が考えられる。一方で、レンズの改良は当然として、他方、1930年代のカラー・フィルムの開発や、続いてはポラロイド・カメラの発明があり、更には自動照準やその他の便宜が、素人にもカメラを使い易いものになっている今日では、もう改善の山登りも9合目ぐらいにきているのではないかと思わせる。基礎科学を例にとるなら、物理学でも、プランク自身が古典的なニュートンの原理を否定して、1900年には量子論を導入したが、その後、アインシュタインによる一般相対性理論の実証やニールス・ボーアによる原子の構造とその放射に関する研究、ハイゼンベルクによる量子力学の創始やチャドウィックによる中性子の発見など、第二次大戦前の時期でも数多くの画期的な進歩が記録されている。戦後においても、進歩のテンポが減速したとは言えそうもないので、物理学での山登りは、まだまだ山頂の見えるところにきているとは言えそうもない。

ところで、経済学の場合はどうであろうか。やはり科学の一分野として、プランクが言ったように、funeral by funeralの付加価値累積を今日でも続けているのか、それとも、ほぼ山頂の見えるところまで来た山登りの比喻が当てはまる状態と言ってもよいのか。この問いに対して、今世紀経済学分野の二大巨星は、後者の立場を採っているようである。すなわち、ケインズは、いずれ近いうちに経済学者の役割は歯科医と同じようなものになるだろうと書いたし、シュンペーターは、理論経済学にとっての今後の課題は何かと問われて、「エレガンスの彫琢」と答えたのだった。両者共、自らの達成した理論分野での業績にゆるぎない自信を持っていたのであろう。

現代の私たちには、そのような自信はない。一つには、学問としての経済学の対象が、自然科学のそれとは違い、人間の意識的行動も手伝って、時の経過の過程で変革と言わないまでも変容することが避

けられないからである。スミスが対象とした18世紀の経済社会は、19世紀にはすでに異なっていたし、20世紀にはスミスの『国富論』も経済学古典の意義しかなかった。21世紀ともなると、更に新しい問題提起が経済学者を忙しくするにちがいない。

現に私たちはいくつかの大きな問題をかかえているが、たとえばIMFや世界銀行が途上国に対して押しつけがましく主張している「市場至上主義」(International Monetary Fundamentalismとさえ評されている)は、かつての自由放任主義の論理の妥当性として理解しうるものであろうか。論理の構造そのものは同じとしても、現実にたいする妥当性において不適格であることは、laissez-faireのチャンピオンと言うべきミルトン・フリードマン自身が、「IMFがなければ、東アジアの現在の危機は発生しなかっただろう」とまで極言したことからも推測できる。現在のグローバリズムのもとでの市場至上主義が新しい形態での帝国主義的支配関係を生みつつあることも、私たちは看過することはできない。市場主義対計画原理が新しい論争課題として経済学者による解明を現に求めていることなど、歯科的な技術問題ではないだろう。

そのほか、宇宙船地球号にとっての温暖化の問題、老齡少子化が進んでいる時代の人口問題や世代間負担移転の問題等、経済学者による分析解答が期待されている現代の個別テーマは数多くある。それに、このところ二言目には成長率なるものを経済運営成否の物差しに祭り上げ、生活の質から目を反らしてしまう風潮は、一度、福祉論の根本にさかのぼって究明すべき課題だと思う。経済学の場合、科学としての進歩が累積的に押し進められる側面があると同時に、常に新しい問題が研究対象として発生することを覚悟しなければならない。

創刊以来半世紀を迎えるにいたった本誌が、こうした期待に応えて、学会誌としてのその使命を全うする上で大きな成果を挙げてこられたことは同慶のいたりである。それというのも、内外の執筆者の方々、レフェリーの御支援、出版社岩波書店のたゆまぬ御協力があってお蔭であるに違ひなく、ここに深く謝意を表しておきたい。

(一橋大学名誉教授)